

介護等体験での学び

大西 勝也

はじめに

本稿では、介護等体験でどのような学びが考えられるのか、いくつか挙げ、その本質的特徴を明らかにしてみる。そして、ここでは、教育実習での学びとの共通性を意識しながら論を進めたい。

1. 仕事のルーティン

介護等体験（以後、「体験」と略記）においても教育実習（以後、「実習」と略記）においても共通に求められることの一つに、与えられた仕事のルーティーンをしっかりと遂行することが挙げられる。時間厳守、教員や職員への報告・連絡・相談、打合せや会議への出席・参加、人権への配慮を伴った児童・生徒や利用者に対する支援やコミュニケーション等、これらが適切に遂行されることは体験や実習においても共通して求められる。職務に専念し、実感をもって学ぶことは、体験の核心といえる。

2. 所与性の受容

体験（介護等体験）において体験者（介護等体験をする学生）が関わる他者は、特別支援学校なら児童・生徒である子ども、教員や職員である大人、そして、社会福祉施設なら利用者である大人（とりわけ高齢者）と職員である。この人々の一人ひとりとは、体験者に先立って特別

支援学校や社会福祉施設にいてその人ならではの独自性（個性）をもってその学校や施設ならではのルールや雰囲気の中で生活している。この生活している現実すべてが体験者の体験に先立って現前に存在している。この現実のすべてが体験者がその学校や施設に登場するに先立ってあるということ、それは体験者にとっていわば所与性である。すでにそこで生活している児童・生徒、利用者、教員や職員の一人ひとりの役割・立場と個性としての特性、また、学校や施設において存在しているシステム、ルール、仕事のルーティーン等を、体験者は、まず所与の現実として受け入れることから始める。体験においては、学校や施設の所与の現実に関心が適応することが基本となる。体験が短期間であること、そして、学校や施設での仕事が最初から限定されるという条件下にあること、これらのことから、見習いとしての体験者として自己限定することが体験受け入れの条件となるのは自然なことである。機関や仕事内容に違いがあっても、この点、本質的に実習も同じといえる。

所与性の受容についてもう少し述べてみる。体験において、人に対しては、児童・生徒、利用者、教員、職員のだれであろうと、その存在・人格をそのまま受容することが肝要である。体験者の側の趣味・趣向は関係ない。一つの社会としての学校や施設でのルールからの逸脱はともかくとして、一般論的には体験者はまじめに生活している児童・生徒や利用者に対して積極

的に助言したり、ましてや、指導する立場にはない。この点は実習と若干異なる。

というのも、実習の場合、授業・学級活動・部活指導といった諸々の職務において実習生が積極的に助言したり、指導することは、むしろ、本筋であり、専任の教員と比べて限定的であるにしても、ある程度積極的に求められるからである。

3. ミメーシス

仕事のルーティンを遂行するに際して、導き手となるのが、学校の教員や施設の職員の人たちである。この人たちによる指導により仕事のルーティンを学ぶのであるが、それとともに、この人たちの実際の職務を遂行する姿（彼らが発することばとその身を通して遂行される行為）から、仕事の本質と仕事を支える精神を直観し、自分もその本質と精神を体現している教員や職員に倣って、仕事を限定的に体験してみる。ここには、ミメーシス（模倣）としての学びがある。よきお手本としての教員や職員との出会いは、体験を印象深い記憶として体験者の心に残す。こうしたミメーシスは実習においても実習生の心の内に起こりえる。

しかし、これに加えて、ミメーシスはいつでもどのように起こるか、また、ミメーシスの対象は何であり、誰であるのかについては予測できるものでもない。ただ、ミメーシスの対象となるのは学校の教員や施設の職員に限られるのではないことは、踏まえておきたい点である。というのも、体験において、生徒や利用者とのふれあいやコミュニケーションは重要な位置を占め、仕事のルーティンを遂行する上での必須条件の一つとなり、そうしたふれあいやコミュニケーションによる人格的関係性の中で他者である生徒や利用者から何かしらの影響を受けることもありえるからである。その影響の内容の如何によっては、児童・生徒や利用者が体験者からのリスペクトの対象ともなりえる。

その際、生徒や利用者に対するミメーシスが体験者の中に生起しているのである。例えば、施設の中で、利用者である高齢者のお世話をし会話をした際に、その高齢者が年をとっても前向きな生き方をしようとする姿勢に共感を覚え、感化され、その高齢者の生きざまが体験者の心の中に、これから生きていく上での模倣対象として刻まれる事例。これは、予期せぬ出来事であり、O.F.ボルノーのいうところの「出会い」の本質とみてよい。⁽¹⁾

「出会い」はボルノーによれば、「教育の非連続的形式」に属するものであり、それは突発的な性格を有する。そもそも、コミュニケーションの一つである「対話」は突発的開眼を呼び起こすきっかけになりうるのである。このことについては、金子晴勇がその著「対話の構造」で言及している。その際、対話において重要な要件として「聴く」という姿勢、相手の心に傾聴する「聴聞の精神」が挙げられている。⁽²⁾

学校の児童・生徒や施設の利用者から発せられる心の声に耳を傾ける姿勢があつてこそ、もしかしたら「出会い」が生起するということで、あらかじめ計画的に予想したり期待できたりするものではないことはわきまえておく必要もある。前もって意識したり、期待しすぎることで、予期せぬ出会いは遠のいていくという因果論的パラドックスに帰結することすらある。ただ、聴く姿勢が自然に体現される中で結果として予測しがたい出会いが体験者に降り注ぐことがあるということを心の片隅に控えめにとどめていてもよいだろう。

4. 時間

仕事のルーティンに関わることでもあるが、体験と実習で身をもって学ぶ（体得する）ことの一つに時間の経過との調和の中で生きるということがある。ボルノーは次のように言っている。「大切なのは性急さと怠りとの間で、時間との正しい調和のなかで生きること、すな

わち、怠けて時間の要求に遅れることもなく、また性急に時間の経過を追い越そうとすることもないことである。・・・時間との関係についての大きな美德は忍耐（Geduld）であり、これはたんなる無関心さとは別のもので、むしろ、自分の力で突進することをあきらめて、独自の法則によって動いているものと調和して生きる能力である。かんたんに言えば、時間と調和して生きることである。忍耐強い人間は、自分に関係のある出来事に、あせることもなくそれにふさわしい時間をまかせ、また自分が行動するときも自分に、けちけちもせずまた浪費もせず、ふさわしい時間を与えることができる。」⁽³⁾

いうまでもなく、所与性に関わることであるが、体験や実習の時間をすべて自分が意のままにコントロールできることはまずない。自分の思いに先立って体験や実習の仕事のルーティーンが決まっており、そのルーティーンの遂行の時間の内実やテンポも自分が一方的に決める対象でもない。所与としての時間の経過に自分を合わせることなしに、体験や実習は成立しない。もちろん、自分の意思でもってそうした限定された時間に合わせながらも、その時間の充実に寄与することができる。ここに身をもって学ぶことがらとしての時間の経過との調和があるといえる。

5. 結語

介護等体験での学びについて4つほど挙げ、少しばかりその本質的特徴に言及してみた。これらの学びは教育実習での学びに共通するものがあるといえる。介護等体験での学びはこれらに尽きるものではなく、ここで言及したことはそのほんの一部に過ぎないが、介護等体験の指導において、留意してよいことがらではないかと考える。

【注】

- (1) O.F. ボルノー（峰島旭雄 訳）「実存哲学と教育学」1976年 理想社
- (2) 金子晴勇 「対話の構造」1985年 玉川大学出版局
- (3) O.F. ボルノー（浜田正秀 訳）「人間学的に見た教育学」1991年 玉川大学出版局 P.116

【参考文献】

現代教師養成研究会編 「教師をめざす人の介護等体験ハンドブック」1999年 大修館書店